

ONLINE ISSN 2436-2190

大館郷土博物館研究紀要

火 内

第20号

国指定天然記念物 大館市のザリガニ生息地保全活動
.....川井唯史・大館鳳鳴高等学校生物部・奈良奈津子・伊藤郁夫・鳥潟幸男 1

続 大館の押絵雛 荒谷由季子 9

2026年3月
大館郷土博物館

紀要名の『火内』とは、元慶2年(878)に律令国家の史書にはじめて表された大館地方の呼称。「ヒナイ」と読み、蝦夷と呼ばれた人々のことば、おそらくアイヌ語の sat(乾いた)pi(小石)nay(沢・谷川)に起因すると考えられ、中世以降は「比内」と記された。

昭和47年(1972)刊行された大館市史編さん委員会発行の『大館市を知る雑誌火内』の誌名を踏襲した。

国指定天然記念物 大館市のザリガニ生息地保全活動

Conservation Activities for the Habitat of the Japanese Crayfish in Odate City, a National Natural Monument of Japan

川井唯史^{1*}・大館鳳鳴高等学校生物部²・奈良奈津子³・伊藤郁夫⁴・鳥潟幸男^{5*}
KAWAI Tadashi^{1*}, Odate Homei High School Biology Club², NARA Natsuko³,
ITO Ikuo⁴, TORIGATA Yukio^{5*}

¹北海道立総合研究機構

²大館鳳鳴高等学校

³大館鳳鳴高等学校 (生物部顧問)

⁴大館自然の会

⁵大館郷土博物館

¹ Hokkaido Research Organization

² Biology Club of Odate Homei High School

³ Advisor of Biology Club of Odate Homei High school

⁴ Odate Nature Society

⁵ Odate City Museum

¹〒046-8555 北海道余市郡余市町浜中町 238

²〒017-0813 秋田県大館市字金坂後 6

³〒017-0813 秋田県大館市字金坂後 6

⁴秋田県大館市

⁵〒017-0012 秋田県大館市積内字獅子ヶ森 1

*問合せ先：川井唯史 tadashikawai8@gmail.com・鳥潟幸男 yukio-torigata@city.odate.lg.jp

要 旨

本稿は、秋田県大館市における国指定天然記念物「ザリガニ生息地」をめぐる研究および保全の歩みを、既存の文献資料、調査報告、実践記録に基づいて再整理し、その歴史の変遷と関与主体の変化を分析したものである。大館市におけるザリガニ生息地保全は、市民生活の中で形成された関係性を基盤として、制度による価値付与、研究による再解釈、危機の顕在化と対応、技術的支援の確立という複数の段階を経て展開してきたことが明らかとなった。とりわけ、生物地理学的な在来性に不確実性が示唆された後も、ザリガニが地域社会との関係の中で保全の対象として意味を持ち続けてきた点は重要である。本稿は、大館市におけるザリガニ生息地保全を、行政や専門家主導の取り組みとしてではなく、地域住民、特に将来世代の主体的関与を基盤とする地域主体型保全として位置付け、今後の保全の在り方を考えるための参照枠を提示する。

キーワード：大館郷土博物館、ザリガニ生息地、天然記念物、地域主体型保全、保全史

1 はじめに

地域における生物保全の実践は、単に対象種の生物学的特性や分布履歴によってのみ正当化

されるものではなく、長期にわたる人間社会との関係性の中で形成されてきた価値付与の過程を含めて理解される必要がある。とりわけ、天

然記念物指定や地域保全活動の対象となってきた生物については、制度・研究・市民活動が相互に影響し合いながら、その位置付けが変化してきた歴史的な文脈を整理することが不可欠である。

秋田県大館市における標準和名ニホンザリガニ（学名 *Cambaroides japonicus* (de Haan, 1841)）をめぐる研究および保全の歩みは、その制度・研究・市民活動が重層的に関与してきた典型例の一つである。本地域では、近世以前から市民生活の中でザリガニが利用・認識されてきた経緯があり、20世紀前半には学術的記載および国指定天然記念物としての制度的価値付与が行われた。その後も、断続的な研究活動、地域行政による調査事業、教育現場や水族館との連携などを通じて、保全のあり方は時代ごとに再編されてきた。しかし、これらの取り組みは必ずしも一貫した理念や主体の下で進められてきたわけではなく、その全体像は個別の研究成果や事業報告として断片的に記録されてきたにとどまっている。

本稿は、大館市におけるザリガニ研究・保全の歴史を、既存の文献資料、調査報告、実践記録に基づいて再整理し、年代順の出来事の列挙にとどまらない形で位置付け直すことを目的とする。特に、本稿では、ザリガニと地域社会との関係を「生活史としての関係形成」「制度による価値付与」「研究による再解釈」「危機の顕在化と再編」「技術的支援の確立」という複数の段階に区分し、それぞれの時代において、誰が主体となり、どのような価値が見出されてきたのかを明確にすることを試みる。

そのための基盤として、本稿では大館市に関するザリガニ研究・保全の主要な出来事を整理した年表模式図（図1）を提示し、これを分析の軸として用いる。この年表模式図は単なる参考資料ではなく、地域における関与主体の変遷と価値付与の構造を読み解くための分析枠組みとして位置付けられる。本稿は新たな実験データや調査結果を提示する原著論文ではなく、既

存情報を統合・解釈する総説的研究として、その意義を明確にする。

本稿の整理からは、第一に、大館市におけるザリガニ保全が、制度や専門家のみならず、市民の関与を軸として継続してきた点が浮かび上がる。第二に、本地域のザリガニ個体群が生物地理学的に在来でない可能性が示唆されているにもかかわらず、歴史的・社会的文脈において保護の対象として意味を持ち続けてきたことが明らかとなる。これらの点は、今後の地域主体型保全のあり方や、非在来生物を含む文化的自然資源の位置付けを考える上で、重要な示唆を与えるものである。

以下では、まず年表模式図に基づいて大館市におけるザリガニ研究・保全の各段階を整理し、その特徴と変遷を論じる。続いて、これらの整理を踏まえ、市民主体による保全の妥当性および今後の方向性について考察を行う。なお、本論文において対象生物の名称は、標準和名のニホンザリガニを使わずに「ザリガニ」を用いた。その理由としては天然記念物の指定に係わる名称に「ザリガニ」が用いられており（鏑木, 1932）、これを尊重したものである。

2 生活史としての関係形成期

本稿で整理した年表模式図（図1）のうち、18世紀後半以前から江戸後期に該当する記録を参照すると、大館地域におけるザリガニは、学術の対象や制度的保護の対象としてではなく、市民生活の中で利用・認識される身近な生物として位置付けられていたことが読み取れる（三田村, 1977）。この時期の史料や聞き取り調査からは、ザリガニが薬用あるいは食用として扱われていたことが示唆されており（井上ら, 1972）、特定の管理や保全を前提としない、日常的な生業や生活文化の一部として存在していた状況がうかがえる（石井編, 1979）。

この段階におけるザリガニと人との関係は、後世に見られるような「保護すべき対象」や「学術的価値を有する生物」としての認識とは質的

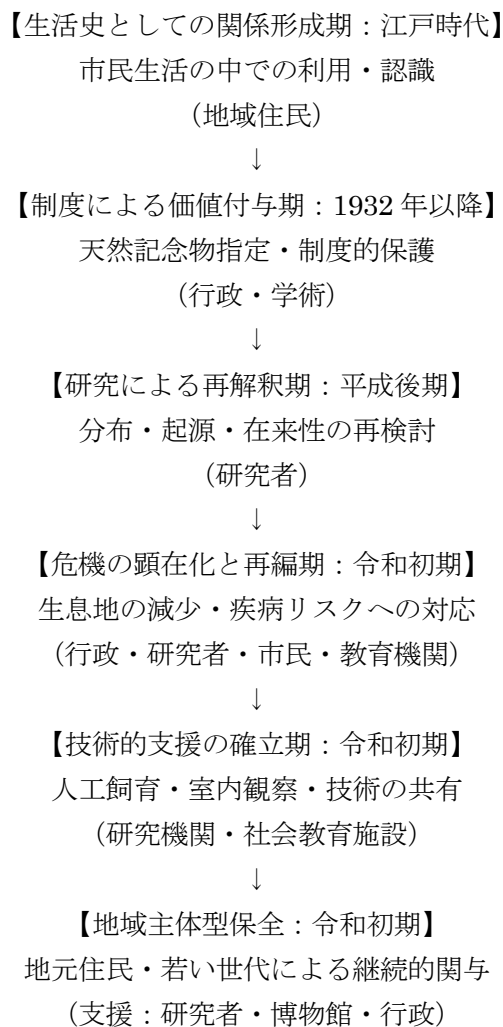


図1. 大館市におけるザリガニ保全の段階構造と関与主体の変遷を示した年表模式図。本図は、本稿で整理したザリガニ研究・保全の歴史を、「生活史としての関係形成」「制度による価値付与」「研究による再解釈」「危機の顕在化と再編」「技術的支援の確立」という段階構造として示し、それぞれの段階における主な関与主体の変遷を概念的に整理したものである。最終段階として示した「地域主体型保全」は、地元住民、とりわけ将来にわたって地域に居住する若い世代の関与を基盤とし、研究者や博物館、行政機関が支援的に関与する体制を想定している。

に異なるものであったと解釈できる。すなわち、ザリガニは地域の自然環境の一要素として暗黙のうちに受け入れられ、その存在は特別に記録される対象ではなく、利用可能な資源、あるいは

身近な生物として認識されていたにすぎない（大館市史編さん委員会編，1983；大館市市史編さん委員会編，1990）。このような関係性は、人為的な管理や保存の意図を伴わない一方で、結果として長期的な共存を成立させていた点に特徴がある。

年表模式図（図1）に示されるこの時期の情報は、記録の量や精度という点では限定的であるものの、後の制度的価値付与や学術的再解釈の基盤となる重要な前史を成している（籠屋，1978）。すなわち、大館市におけるザリガニ保全の歴史は、制度や研究によって一方的に創出されたものではなく、まず市民生活の中で形成された関係性の上に重ねられる形で展開してきたと位置付けることができる。この「生活史としての関係形成期」は、後続する各段階を理解する上での前提条件として、本稿全体の出発点を成すものである。

3 制度による価値付与期

年表模式図（図1）に示される1930年代の記録を参照すると、大館市におけるザリガニは、この時期に初めて学術的記載および文化財保護制度の枠組みの中に明示的に位置付けられたことが分かる。1932年には生息地が学術的に記載され（鏑木，1932）、続く1934年には国指定天然記念物として指定されており、ザリガニはそれまでの市民生活に根ざした存在から、国家的制度によって価値を付与された対象へと転換した。この過程は、ザリガニそのものの生物学的性質が変化したことによるものではなく、評価の主体と枠組みが変化した結果として生じたものである。

この段階において特徴的なのは、ザリガニが「保護されるべき存在」として制度的に固定化された点にある。すなわち、学術的知見と行政的判断を通じて、ザリガニは地域の自然環境の一要素という位置付けを超え、保存の対象として特別な地位を与えられた。しかし同時に、この価値付与は市民の日常的な利用や関与の延長

線上で形成されたものではなく、外部から導入された学術的・制度的視点に基づくものであったと解釈できる。このことは、後の時代において、制度と地域社会との間に距離や再調整の必要性が生じる背景ともなった。

一方で、年表模式図(図1)から読み取れるように、この制度的価値付与は、その後の長期にわたる研究や保全活動の出発点を形成した点で重要な意味を持つ。天然記念物指定によって、ザリガニは継続的な関心と記録の対象となり、断続的ではあるものの調査や管理が行われる基盤が整えられた。すなわち、本期はザリガニを「生活史の中の存在」から「制度により保全される対象」へと転換させた画期として位置付けられ、後続する研究による再解釈や危機対応の前提条件を成している。

4 研究による再解釈期

年表模式図(図1)に示される1970年代以降の記録を参照すると、大館市におけるザリガニは、制度的に価値付けられた存在として固定される一方で、その実態や位置付けが改めて研究の対象として問い直される段階に入ったことが分かる。この時期には、生息状況や分布に関する断続的な調査が行われ、天然記念物として指定された存在を「保全すべき対象」として維持するだけでなく、その生物学実態を把握し直そうとする動きが見られるようになった(川井ら, 1990)。

2000年代に入ると、大館市内において生息地調査が再開され、研究の視点はより体系的なものへと移行した(笹木, 2004)。年表模式図(図1)に示される文献調査や現地調査の蓄積は、ザリガニの分布や生息環境を再評価する基盤を形成するとともに、それまで自明視されてきた前提条件に疑問を投げかける契機となった。すなわち、制度によって長らく「守るべき存在」として扱われてきたザリガニが、科学的検証の対象として再び開かれた段階である。

江戸時代の文献において既に本種の存在が

確認されることから、少なくとも当該時期には地域内に定着していたことは明らかである。一方で、それ以前の導入時期を直接示す史料は確認されておらず、現時点では江戸期を含む近世のいずれかの時点で人為的に移入された可能性が最も妥当な解釈である(大館郷土博物館編, 2017)。この点は、年表模式図(図1)に示される本期の最も重要な転換点の一つであり、ザリガニをめぐる従来の理解に大きな再解釈を迫るものであった。すなわち、制度的には長年「地域固有の自然」として扱われてきた存在が、生物地理学的観点からは必ずしも在来とは言えない可能性を持つことが、研究によって初めて明示されたのである。

この「研究による再解釈期」の特徴は、制度によって固定化された価値を否定することではなく、その前提条件を科学的に問い直す点にあると解釈できる。研究成果は直ちに保護の正当性を失わせるものではなかったが、少なくとも、ザリガニ保全の意味を生物学的在来性のみならず、依拠して説明することの限界を明らかにした。この段階で生じた認識のずれは、後に危機対応や保全体制の再編を促す背景となり、保全の論理をより多層的なものへと展開させる起点となった。

5 危機の顕在化と再編期

年表模式図(図1)に示される2010年代半ば以降の記録を参照すると、大館市におけるザリガニ保全は、研究による再解釈の蓄積を背景として、現場レベルで具体的な「危機」として認識される段階に移行したことが分かる。本期において特徴的なのは、抽象的な価値や位置付けの再検討にとどまらず、生息地の消失や環境悪化、疾病リスクといった具体的な問題が顕在化し、それに対する対応が現実的課題として突き付けられた点である。

2014年から2017年にかけて、大館市教育委員会主導で実施されたザリガニ生息地緊急調査事業は、この転換を象徴する出来事である(大

館郷土博物館編, 2017). 年表模式図(図1)に示されるように, 本事業では生息地の現状把握が集中的に行われ, 従来暗黙のうちに維持されてきた「天然記念物として存在している」という前提が, もはや自明ではないことが明らかとなった. すなわち, 制度的指定が存続していても, 生息環境が損なわれれば対象そのものが失われ得るという現実が, 初めて体系的に共有されたのである.

この過程で注目すべき点は, 保全の主体が再編され始めたことである. 年表模式図(図1)に示される高校生による参画は1954年以降, 断続的に行われてきた長い歴史を有する. 一方で, 2016年以降は, それ以前と比較して参画の機会が増加し, 継続的な関与がみられるようになった.(飯塚ら, 2023; 河田ら, 2019; 工藤ら, 2017), 従来の行政や専門家に限定されていた関与の枠組みが拡張されていったことが読み取れる. さらに, 生息地の植生や土壌特性の詳細な解析(鬼久保ら, 2018), 水カビ病リスクに対する環境DNA調査といった取り組みが進められ(池田・川井, 2022), 研究成果が直接的に保全実践へと接続される段階に入った.

この「危機の顕在化と再編期」は, 研究によって提示された再解釈が, 現場に混乱や緊張をもたらした段階であると同時に, 保全のあり方を再構築する契機となった段階でもあると解釈できる. すなわち, 在来性や制度的価値に依拠するだけでは保全を持続できないことが明らかとなり, 行政, 研究者, 市民, 教育機関といった複数の主体が, 役割を再調整しながら関与する必要性が共有されるに至った. 本期は, 後続する技術的支援の確立期に向けて, 保全が理念から実践へと本格的に移行する転換点として位置付けられる. こうした危機対応の過程において, 行政・研究機関・教育現場に加え, 技術教育機関による実務的支援が重要な役割を果たした点も特筆される. とりわけ, 稚ザリガニの一時的保護および観察を目的とした飼育環境の整備は, 現場における喫緊の課題であった. これ

に対し, 秋田職業能力開発短期大学校において, ニホンザリガニ稚ザリ用飼育ボックスの設計・製作が行われ, 実際の保全現場で使用可能な飼育容器が開発された(遠藤・鳥潟, 2021). 本飼育ボックスは, 稚ザリガニの逃避行動や共食いを抑制しつつ, 管理・観察の効率化を図ることを目的として設計されたものであり, その後, 大館郷土博物館における稚ザリガニ飼育にも継続的に用いられている. この取り組みは, 研究成果や理念に基づく保全にとどまらず, 現場の要請に即した技術的解決策が外部機関との連携によって提供された事例として位置付けられる.

6 技術的支援の確立期

年表模式図(図1)に示される2020年代以降の記録を参照すると, 大館市におけるザリガニ保全は, 危機対応と主体再編を経て, 具体的な技術的支援の確立へと進展したことが分かる. 本期の特徴は, 理念や制度の再検討にとどまらず, 現場で実行可能な手法や知見が体系化され, 保全活動を支える実務的基盤が形成された点にある.

2020年以降, 人工飼育および調査方法の整理・体系化が進められたことは, この段階を象徴する動きである(鬼久保・川井, 2020). 年表模式図(図1)に示されるこれらの取り組みは, 野外環境に依存した従来の保全に対し, 補完的な選択肢を提示するものであり, 生息地環境の変動や突発的なリスクに対して柔軟に対応するための技術的基盤を提供したと解釈できる. すなわち, 保全は「現地を守る」ことに限定されず, 対象生物の生理や発生段階を理解した上で支援する段階へと拡張されたのである.

さらに, 男鹿水族館 GAO における卵発生の室内観察など(清田・川井, 2021), 研究機関の職員と社会教育施設が連携した実践的取り組みは, 技術的支援の社会的受容を高める役割を果たした. 年表模式図(図1)に示されるこれらの活動は, 専門家による研究成果を閉じた知識にとどめるのではなく, 可視化・共有可能な形

で社会に還元する試みとして位置付けられる。このことは、保全活動が一部の専門家に依存するものではなく、広範な主体によって支えられる体制へと移行しつつあることを示している。

この「技術的支援の確立期」は、研究による再解釈と危機対応を経て得られた知見が、初めて安定的な実践として定着し始めた段階であると解釈できる(飯塚ら, 2023)。すなわち、在来性や制度的指定の有無にかかわらず、対象生物とその生息環境をいかに維持・理解し、次世代へと引き継ぐかという問いに対し、具体的な方法論が提示されるようになったのである。本期は、大館市におけるザリガニ保全が、試行錯誤の段階を越え、持続的な実践へと移行する基盤を形成した段階として位置付けられる(河田ら, 2019)。

7 考察

本稿で整理した大館市におけるザリガニ研究・保全の歴史は、単なる過去の記録の総覧ではなく、「なぜこのザリガニを保全するのか」「誰がその保全を担うべきなのか」という根源的な問いに対する一つの応答として位置付けられるべきである。本稿が示す立場は明確であり、大館市におけるザリガニ保全の主体は、行政や専門家ではなく、地域に暮らし、今後も長期にわたってこの土地と関係を結び続ける地元の人々である。とりわけ重要なのは、現在および将来にわたって地域に居住し続ける若い世代が、このザリガニとその生息環境を「自分たちの自然」として理解し、関与していくことである。専門家や研究機関、博物館、水族館といった外部的主体は、そのための知見や技術を提供する支援者であり、保全の意思決定や日常的な実践の主体を代替する存在ではない。この関係性の整理は、保全活動を一過性の事業や外部主導の取り組みに終わらせないために不可欠である。本稿が対象とするザリガニは、生物地理学的な在来性のみを根拠として保全されてきた存在ではない。むしろ、その価値は、長期にわたる人間社

会との関係の中で形成され、制度・研究・市民活動が重なり合う過程で意味付けられてきた点にある。このような存在を保全する意義は、「自然だから守る」「希少だから守る」といった単純な理由に還元されるものではなく、地域の歴史と記憶、そして将来世代への継承可能性に基づいて説明されるべきである。本稿では、大館市におけるザリガニ研究・保全の歩みを、「生活史としての関係形成」「制度による価値付与」「研究による再解釈」「危機の顕在化と再編」「技術的支援の確立」という段階構造として整理した。この整理から明らかとなったのは、本地域における保全が、初めから一貫した理念や単一の主体の下で進められてきたものではなく、それぞれの時代における社会的要請や知見の蓄積に応じて、関与主体と保全の意味が再編されてきた過程である。特に「研究による再解釈期」において示唆された人為的移入の可能性は、従来の理解に修正を迫るものであったが、それは保全の正当性を否定するものではなく、むしろその根拠を再構築する契機となったと解釈できる。すなわち、ザリガニ保全の意義は、生物学的在来性の有無にのみ依拠するものではなく、地域社会との関係性の中で形成されてきた価値に基づいて説明される必要があることが、研究の進展によって明確になったのである。2010年代以降に顕在化した生息地の危機や疾病リスクへの対応は、こうした再解釈を背景として、保全を理念から実践へと移行させる段階であった。行政、研究者、市民、教育機関がそれぞれの役割を再調整しながら関与する体制が形成され、さらに近年では、人工飼育や室内観察といった技術的支援が加わることで、保全の選択肢はより多様なものとなっている。これらの過程を通じて示されたのは、大館市におけるザリガニ保全が、制度や研究のみで完結するものではなく、地域社会に根ざした主体的関与によって初めて持続し得るという点である。本稿の考察は、こうした保全のあり方を、個別事例の集積としてではなく、歴史的文脈の中で整理し直す試みで

あり、今後の地域主体型保全を考える上で一つの参照枠を提供するものと考えられる。

8 結語

本稿では、大館市におけるザリガニ研究および保全の歴史を、既存の文献資料、調査報告、実践記録に基づいて再整理し、その変遷を複数の段階に区分して位置付け直した。これは、過去の出来事を年代順に列挙することを目的としたものではなく、「なぜこのザリガニが保全されてきたのか」「誰がその保全を担ってきたのか、また担うべきなのか」という問いに対し、歴史的・社会的文脈を含めて応答する試みであった。

本稿の整理から明らかとなったのは、大館市におけるザリガニ保全が、市民生活の中で形成された関係性を基盤としつつ、制度による価値付与、研究による再解釈、危機対応、技術的支援といった要素が重なり合うことで展開してきたという点である。この重層的な過程そのものが、本地域における保全の実態であると位置付けられる。

とりわけ、本地域のザリガニが、生物地理学的な在来性のみによってその保全の意義を説明できる存在ではないことは、研究の進展によって明らかとなってきた。しかしながら、ザリガニが保全の対象として意味を持ち続けてきた背景には、長期にわたる人間社会との関係の中で、その存在が地域の記憶や実践と結び付いてきた経緯がある。この点は、保全の価値が生物学的属性のみに還元されるものではないことを示している。

以上を踏まえると、大館市におけるザリガニ保全の主体は、地域に暮らし、この土地と今後とも関係を結び続ける地元の人々であると位置付けられる。特に、将来にわたって地域に居住する若い世代が、ザリガニとその生息環境を「自分たちの自然」として理解し、関与していくことが、保全を持続的なものとする上で重要である。研究者、博物館、水族館、行政機関は、そのための知見や技術を提供し、活動を支援する

立場として関与することが求められる。

本稿は新たな調査結果を提示するものではないが、断片的に蓄積されてきた研究・制度・市民活動の記録を統合し、地域主体型保全の成立過程を可視化した点に意義がある。この視点は、今後、在来性が不確実な生物や人為的影響を受けた生態系をどのように評価し、次世代へと引き継いでいくかを考える上で、一つの参照枠となるであろう。

大館市におけるザリガニ保全の取り組みは、過去の成果として完結するものではなく、現在も継続する実践である。本稿が、その実践を担う地元の人々、とりわけ若い世代にとって、自らの関与の意味を静かに確認するための一助となり、今後の保全活動の継続と発展に寄与することを期待したい。

9 著者の貢献

本稿の作成における各著者の主な役割は以下のとおりである。

川井唯史：原稿全体の構成設計、既存文献・報告の整理と統合、本文の起草および最終原稿の取りまとめ。

大館鳳鳴高等学校生物部(神田優妃・戸舘美有・伊藤あおい・若宮すず・永井初奈)：保全活動の実践および継続記録の提供、年表作成に係る情報整理、本文内容の確認。

奈良奈津子：生物部の活動統括、記録・情報の確認、原稿内容の確認。

伊藤郁夫：地域における長期的な観察・関与に基づく情報提供、内容の確認。

鳥潟幸男：地域保全活動全体に関する資料・情報の提供、原稿内容の確認。

謝辞

本稿の取りまとめにあたり、大館鳳鳴高等学校生物部においてザリガニの調査および保全活動に携わってきた歴代の生徒諸氏に感謝の意を表したい。これまで同部において調査・記録を担ってきた継続的な取り組みは、本地域におけ

る保全活動の基盤を成すものである。また、調査や記録を通じて活動を支えてきた関係者各位に深く謝意を表す。

引用文献

遠藤裕之・鳥潟幸男 (2021) : ニホンザリガニ稚ザリ用飼育ボックスの設計・製作. 東北職業能力開発大学校紀要, **31**, 81-84.

飯塚凜人・池田幸資・川井唯史・鳥潟幸男 (2023) : 天然記念物「ザリガニ生息地」付近で絶滅に瀕している ニホンザリガニの分布に関する知見. 火内, **17**, 1-4.

池田幸資・川井唯史 (2022) : 秋田県大館市におけるザリガニ類の水カビ病に関する情報. 青森自然誌研究, **27**, 187-188.

井上隆明・田口勝一郎・渡部綱次郎編 (1972) : 新秋田叢書 (九). 歴史図書社, 東京, 474 pp. (引用頁 : 185)

石井博夫編 (1979) : 写真集 明治大正昭和 大館—ふるさとの思い出 52—. 国書刊行会, 東京, 164 pp. (引用頁 : 153)

鏑木外岐雄 (1932) : ザリガニ棲息地天然記念物調査報告書 動物之部 第二輯. 史跡名勝天然記念物保存協会編, 刀根書院, 東京, 91-93.

川井唯史・三宅貞祥・浜野龍夫 (1990) : 分布南限のザリガニ *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) の個体数密度と再生産に関する研究. 甲殻類の研究, **19**, 55-61.

河田健登・肥田宗友・鳥潟幸男・川井唯史 (2019) : 大館市内のニホンザリガニの分布に関する情報と博物学的知見. 火内, **14**, 53-61.

清田環希・川井唯史 (2021) : 室内水槽におけるニホンザリガニの卵発生に伴う卵色の変化. 火内, **15**, 7-11.

籠屋留太郎 (1978) : 尾去沢産ザリガニの保護について. 上津野, **4**, 24-36.

工藤晴香・肥田宗友・鳥潟幸男・川井唯史 (2017) : 国指定天然記念物生息地のニホンザリガニの大館市民における認知状況およ

び分布南限生息地の現状と歴史. 火内, **13**, 1-9.

三田村鳶魚編 (1977) : 未刊随筆百種. 中央公論社, 東京, 495 pp.

大館郷土博物館編 (2017) : 平成 26-28 年度 ザリガニ生息地緊急調査事業調査報告書. 大館市教育委員会, 大館, 132 pp.

大館市史編さん委員会編 (1983) : 大館市史 第3巻 上. 大館市, 大館, 660 pp.

大館市市史編さん委員会編 (1990) : 大館市史 第5巻. 大館市, 大館, 450 pp.

鬼久保浩正・川井唯史 (2020) : ニホンザリガニの人工飼育方法と調査方法 (総説). 青森自然誌研究, **25**, 69-75.

鬼久保浩正・薄井隆義・池田幸資・川井唯史 (2018) : 本州のニホンザリガニ生息地の植生と土質. 青森自然誌研究, **24**, 1-4.

笹木政美 (2004) : ニホンザリガニ分布調査中間報告. 火内, **4**, 9-20.

続 大館の押絵雛

荒谷由季子¹⁾

¹⁾ 大館郷土博物館

¹⁾ 〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森 1

¹⁾ 問合せ先: kyodokn@city.odate.lg.jp

要旨

押絵雛は全国で見られるが、大館郷土博物館に寄贈された人形は概ね市販されたものではなく、使用済みのハガキや包装紙、帳簿の余りなどを使った自家製が多く、それぞれの家庭での工夫の跡が窺える。また押絵雛が見つかるのは商家(大店)、地主、武家(中級以上)といういわゆる素封家、あるいは町の名家と言われる家々に限られていて、また好まれた題材からしても歌舞伎や浄瑠璃、歴史に詳しい知識を持ち合わせた、金銭や時間に余裕のある人達によって作られてきたことが分かる。

はじめに

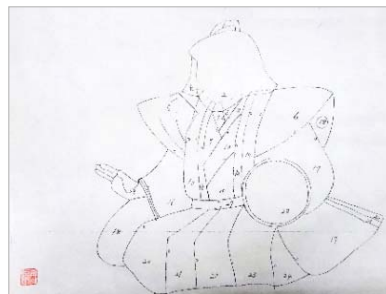
押絵雛とは、現在では色紙や羽子板などでしか見られなくなった押絵という技法で作られた細工物だが、かつては全国各地で作られてきたお雛様的一种をいう。

押絵雛は綿を入れた布を括る(ひとつにたばねる)ことから大館では「くくり雛」とも言われてきた。

1996年から2015年までに大館郷土博物館に寄贈された押絵雛145体の記録を2015年3月発行の大館郷土博物館研究紀要「火内」第12号で「大館の押絵雛」としてまとめたが(以下(荒谷, 2015)で表記)本稿ではそれ以後2015年から2025年までに寄贈を受けた5家、163体の押絵雛を「続 大館の押絵雛」として紹介する。

2015年の時点では大館市内には戦前に作られた300体を優に超える数の押絵雛が存在していたが(荒谷, 2015)、この度紹介する押絵雛163体はこの数には入っておらず、全く新しく見つかったものである。よって300体という数は廃棄されない限りそのまま引き継がれることとなる。

押絵雛の製作手順は、次の通りになる。
まず紙に下図を描く。



下図から分解図、型紙を作る。

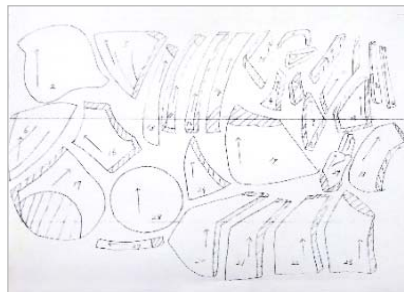


図1 押絵雛の製作手順 ~

型紙に合わせて布地を裁つ。



型紙と布の間に綿を入れる。



図に合わせて部分品を作るが、のりしろ分を残しておく。各パーツを台紙に貼り付けていく。



厚紙などで型どりした裏台紙との間に串を置き表と合わせて貼る。



完成。台などに立てる。串を使わず立てかける場合もある。



図2 押絵雛の製作手順 ~

かねざね 金澤家の押絵雛(図K1~図K43)

2015年に紀要「大館の押絵雛」が世に出た後、北鹿新聞がその紹介記事を載せてくれたことがある。それを見たと言って一本の電話が架かってきた。内容は、「家に押絵雛らしきものがあるので見に来てほしい」というもので、早速伺ってみると、そこには大きな木箱にびっしりと重なり合った紛れもない押絵雛を見ることができた。

連絡をくれた夫人によると、家を建て替える

かで蔵を整理した時見つけたもので、「嫁に来てから(恐らく戦後に入ってからと思われる)一度も目にしたことがなく話も聞いたことがない」とのことであった。

雛は比較的大型で手の込んだものが多く、保存状態も良好であった。

ただ図版を見ると分かるように男雛、女雛がない。あるのは縦18.5×横14.5cmの男雛と、縦16.5×横6.0cmの女雛の小さな立雛(図K9、10)のみで五人囃子とは釣り合わない。

平安貴族の衣装を着けた男女がいるものの、すべて立ち姿で到底内裏雛には見えず、一部天神(黒衣装)と小野小町かともしてみたが、確定には至らなかった。

雛は大小合わせて49体を数えた。

官女は同じ様相の3体はいわゆる三人官女、これとは別に4体が出て、こちらはそれぞれ笛、琴、鼓などの楽器を持っていたように思われる。

大館ではよく見る「苺萱桑門筑紫轆」1の苺萱道心と石童丸(図K29、30)、「加賀見山旧錦絵」2の岩藤、尾上、お初(図K21、22、23)、「常盤御前雪中逃亡」3の常盤御前、今若、乙若(図K26、27、28)、他にお馴染みの大黒・恵比寿、高砂の翁と媪、三番叟、目につくのは大型の武田信玄と上杉謙信(図K19、20)、この地方ならではの「鬪鶏」(図K36)4も興味深い。

金澤家は三代にわたって吉郎治を名乗るが、明治初期には大町にその名がある。三代目吉郎治は大館初の郵便取扱人で、その子栄吉が二代目大館郵便局長となり1916年(大正5)年に67才で亡くなっている。

その後小(あるいは少)一郎、永次郎と続くが、雛は時代的に栄吉前後のものではないかと思う。資料によれば「金澤家は素封家で片山に多数の小作人を有し、古来より縁故者も多かった」とある。代々感恩講理事を務めた町の名士である。

1 「苺萱桑門筑紫轆」

高野山に世を逃れた苺萱道心を、その子石童丸が尋ねるが、我が子と知りつつ父は没したと偽って名乗らず帰す場面。

2 「加賀見山旧錦絵」

中老尾上を局岩藤が草履で打ち据えて恥を与える。尾上は無念のあまり自害してしまう。下女お初が主人の恨みを晴らすというお話。

3 「常盤御前雪中逃亡」

今若、乙若、牛若と共に雪の中、追手から逃れる常盤御前。

4 「鬪鶏」鶏を戦わせて観覧する。「鬪鶏」とも言う。

下遠家の押絵雛(図S1～図S22)

下遠家の先祖は関ヶ原以後、茨城から大館城代となる小場義成に従ってこの地に着いた武家である。

戊辰戦争で家屋は焼失したというが、寛永から明治に至るまでの古文書が残されていて、大館の武家社会を知る大きな手掛かりとなっている。

押絵雛は大館市史第4巻の民俗編(大館市史編さん委員会編,1981)に「下遠家のくくり雛」として写真が載っていて(図3)その存在は前から知ってはいたが、2016年夏突然電話があり寄贈が実現した。

写真からこの家の雛飾りは内裏雛が座雛と押絵雛の二種類あり、他に22体の押絵雛、土人形、張り子の犬、着物姿の抱き人形、セルロイドの西洋人形と様々なものが入り交じっているのが分かる。左側の座雛の内裏雛は比較的大型



図3

で大正期の様相。一方右側に置かれた押絵の内裏雛も比較的大きく素朴な顔立ちである。それに反して三人官女は座雛で手の平に乗る大きさ、五人囃子はまた押絵雛に戻っている。

押絵雛だけ見ていくと、千歳、面箱持、三番叟、天神様、大黒、恵比寿などだが猩猩 5 だけは裏の判から角館で作られたと分かる。「加賀見山旧錦絵」の岩藤、尾上、お初の3体は、図4の小松原家の雛飾りに写っているものとよく似てはいるが小松原梅さん 6 の作だとすれば裏紙が反故紙であるのが気になる。梅さんの作は売り物でもある為、白の良質な厚紙を使用している。



図4

闘鶏は通常2体一組だが1体しか残っていないものの本物の鳥の羽を使用している。そしてこの1体と子供が犬を抱いた1体の裏紙に明治34(1901)年の新聞紙が使用されていた。

他にも「第5回内国勸業博覧会」明治36(1903)年、「大正帝・大典記念博覧会」大正4(1915)年受賞と刷られた茶屋の包装紙、明治42(1909)年に開通した小坂鉄道二ツ屋線の駅前住所の判が押された年賀はがきが裏紙として利用されていることから、この家の押絵雛は概ね明治後半から大正期初めに作られたのではないと思われる。

それに家人も知らなかったそうだが、押絵雛の入った箱の底から江戸から明治、遅くとも大正初期ころまでに刷られた錦絵50枚が出てき

たこともそれを裏付けることになった。

5 「猩猩」中国の伝説に登場する酒好きの想像上の生き物。

6 押絵作り名人、詳しくは(荒谷,2015)参照。

野口家の押絵雛(図N1~図N41)

野口家は、今は駐車場となっている場所で呉服屋を営んでいた商家で、地元では「しゃくしの家」と呼ばれている。「しゃくし」は杓子の意味で飢きんの時、柄杓(ひしゃく)で米がゆを配ったのでそう呼ばれるようになったとのこと。

2019年夏、家の解体工事に伴い蔵も解体撤去する為中を整理、かつて飾っていた押絵雛を当館に寄贈してくれることになった。

この家の雛飾りは、平安期の貴族が野に遊びに行く遊山の図の屏風の前に座雛の内裏雛を据え、あとは押絵雛41体で構成されている。

五人囃子、天神様、神功皇后、武内宿禰、大黒恵比寿など定番のものもあるが、変わったところでは「曾我兄弟」(図N8、9)、「宮城野・信夫の仇討ち」(図N27、28、29)6の仇討ちもの、歌舞伎からは「伽羅先代萩」(図N19~26)、「義経千本桜」、「八百屋お七」、他に二十四孝の「孟宗の故事」7から大きなタケノコを担いだものもある。

この家の雛は同じ布を使用していたり、似たシチュエーションであったりしてヒントは多々あったものの、こちらの知識不足で最後まで題材名が確定できず不明のまま終わってしまったものが多かった。

6 「宮城野・信夫の仇討ち」父を志賀団七に殺された姉妹が江戸に出て姉・宮城野は鎖鎌、妹・信夫は薙刀を修行し、故郷に帰って仇を討つお話。

7 二十四孝「孟宗の故事」

中国の24人の孝行者のうちの1人孟宗が寒中に母の求めた筍を掘り当てて帰る場面。孟宗竹の名前の由来となる。

村上家の押絵雛(図M1～図M23)

2020年2月の寄贈。村上家は印刷業をなりわいにしているが、元は大町に住んでいたとのこと。十二所役場文書に「明治17(1884)年4月西大館町28番地 村上平蔵の印刷所有」とあるが、明治6年の町地図を見ると村上姓は4件ほどあり、平蔵の名は見当たらず、28番地も不明の為特定はできなかった。

雛は比較的定番のものが多く、内裏雛、五人囃子、大黒・恵比寿、福祿寿、千歳、面箱持、三番叟、翁媪の高砂、そして常盤御前雪中逃亡、他に小型にはなるが佐藤忠信・静御前の道行初音旅(義経千本桜)他となる。五人囃子は座雛もあり、隨身は大型の座雛で構成、台に乗った神功皇后・武内宿禰、牛若丸と弁慶も一緒に飾られていたようだ。

時代は不明だが比較的古いのではないかと推測する

小松原家、下遠家、野口家、そしてこの家もそうだが、かつての大館近辺における雛飾りは座雛と押絵雛が混在したにぎやかなものであった傾向が強い。もしかすると金澤家に内裏雛がないのは、別に座雛の存在があった可能性が大きい。

それともう一つ、下遠家で見つかった錦絵だがそれぞれを薄い紙で縦に何枚かつなげて雛壇の後ろに下げていたようで、他の家でも同じようにして背景を飾っていたとの証言があった。

小山家の押絵雛(図O1～図O28)

2025年7月、横浜在住の男性から「先祖から引き継いだ短刀と押絵雛の引き取り先を探している」との電話が入った。

その後何度かのやり取りの後、まずは押絵雛を送ってもらうことになった。

送られてきた人形は全部で28体、保存状態はきわめて良く修理を要するものはなかった。

ただこの家の雛は大きさがまちまちで大きい

ものは40cmを超し、小さいものは10cmを下回っており飾るのにはいささかアンバランスな様相を呈している。

題材は天神、常盤御前雪中逃亡、神功皇后・武内宿禰、高砂、先代萩など。また押絵雛の題材としては比較的ポピュラーな司馬温公鬮割8、鯛運び等を見ることができた。

特筆すべきは多数を占める小さい雛で、全て精巧に作られ、布や小物も最適と思われるものが使用されている。中でも神功皇后・武内宿禰(図O20、21)の鎧の材料は、一見鉄か皮かと思ふばかりである。

とにかく顔描きはよほどの熟練者でなければ描けない繊細なもので、これらが誰によっていつどのようにして作られたのか不明であるのは何とも残念なことである。

そしてこれらとは明らかに違う作りの「宝船・桃太郎鬼退治」(図O4)の裏側にこの雛の作者と制作年が書かれていた。

それはさておき今回期せずして大きな収穫となったのは「^{おやまけ}小山家」を知る機会を得たことである。

のちに送られてきた系図や何人かの郷土史家の記述を見ると、小山家の先祖小山縫殿丞勝茂は、延宝年間500石を給され家老職を務めていて、当時南部との国境論争に尽力し、秋田側に有利に事を運んだとされている。ところがこの後小山家の記述は市史等で全く見ることはなく、幕末になって小山熊治他小山姓の何人かを確認するにとどまった。しかも大館市史他の索引は「お」ではなく「こ」の項に入っていることが多く、つまりは「^{こやま}小山」として登録されていた。

先の縫殿丞から数えて7代目にあたる熊治信安は明治6(1873)年19歳という記録が残っている。家は旧城近くにかかなり広い土地を有していた。さらに翌明治7年、でき立ての向陽小学校(現在の釈迦内小学校)に20歳で招聘され、初代校長として『釈迦内小学校創立120周年記念

誌』25頁に顔写真が載っている(記念誌・記録編集委員会編,1994)。その後熊治は北海道に渡り函館近くの木古内の小学校校長となっている(odate-shakanai,2020;shinya5222,2020)。

押絵雛裏の「父細工/持主敬吾 明治三十八年凱旋記念」(図04 2)とあるのは、敬吾が熊治の末息子であると系図から知れば、「宝船・桃太郎鬼退治」を制作した人物はこの小山熊治その人であることが分かる。

明治38年と言えば日露戦争終結の年で凱旋は熊治自身のことが、あるいは一般的な祝賀の意であったのかは不明であるが、熊治という人物と他の雛の裏紙に利用されていた一銭五厘の八ガキからこの家の雛も明治後半から大正時代にかけてのものと推測する。

小山家の祖は知る人ぞ知る平安末期から鎌倉初期にかけての武将小山政光である。その子孫が栃木から津軽、そして大館に来、その才を發揮して家老にまで上り詰めた。

他に鷹巣にも開拓者、並びに浄運寺を建立した人物としての記録が残されている。この家に関しては今後調査の必要があり大館の歴史に新たな項目が加わることを期待したい。

※8 ^{しばんこうかめわり}「司馬温公鵞割」高価な鵞の周りで遊んでいた友達が鵞に落ち溺れそうになったので、石で鵞を割って友達を助けた温公を父は叱らずほめたたえた。

おわりに

2015年に「大館の押絵雛」が出た後北鹿新聞が紀要の紹介記事を載せてくれたことを冒頭で述べた。

その記事を読んだ市内の85才の女性から電話が架かってきた。紀要で紹介した小松原梅さんのことである。

「小松原梅さんをよく知っている。梅さんは押絵雛作りの名手で八代呉服店(現在は無し)から布を購入、大和

屋(雑貨などの問屋)に卸していた。昔(戦前)北秋くらぶ(大館の老舗料亭)で沢山の押絵雛を見たことがある、そして作り手は小松原梅さんのはずだ。」

という話をしてくれた。早速北秋くらぶの戦後生まれの現当主に尋ねたが、見たことも聞いたこともないとのことであった。そこは戦時中建物为国に売却、戦中及び戦後もしばらくの間病院として使用されていたこともあり、荷物を寄せたりしているうちに失くしたのではないかとのこと。

またこの女性は

「子供のころ雛祭りの時期は良い着物を着て“くらぶ”に行ったものだ」

とも話してくれた。それは昭和初期生まれの女性からも同じような話を聞いたことがあるものの、その人はお菓子や白酒が目当てで「お雛さんのことはよく覚えていない」とのことであった。ただ当時北秋くらぶでは押絵雛ばかりでなく慶応元年に江戸で名のある人形師が作った立派な座雛が大広間に飾られていたはずである。この座雛と五人囃子など人形、諸道具等は今当博物館にあり、春先展示されて広く市民に知られている。

これとは別に小松原梅さんの本家の方からも「沢山あった押絵雛(図4)を昭和33年の大町大火で焼いてしまい残念だ」との手紙が届いた。火事が原因で失った押絵雛は大館の場合相当数にのぼると思われる。そういった証言を何度も耳にしたからである。そして同時にかつては座敷いっぱいにお雛様を飾って雛祭りを楽しんだということ話をしてくれた人も少なからずいた。

明治時代、大町の呉服屋店主が残した『小野儀助日記』にあるような

「ひいな見仁群集終日也、夜二入り

ても参る仁あり」(明治21年)
 「本日諸方より雛見大勢来たり、ひきもきらす」(明治23年)
 「本日十時頃より雛見大群集也」(明治24年)
 「午前より雛見沢山」「午後見物人増増多うく」(明治25年)

(荒谷,2015 41 44)というようなことは今ではすっかりなくなってしまったように思える。

大館郷土博物館では13の家から押絵雛、308体の寄贈を受けているが、その内容を見ると、雛の他、定番ものの恵比寿大黒、三番叟、高砂など現代でも容易にわかるものがある一方、神功皇后・武内宿祢のようにかつては知る人が多くいたものの今ではなじみのなくなってしまう例もある。

そして最も多く見られるのが浄瑠璃、歌舞伎の演目を題材にしたものであるが、これは全国的な傾向であって、様々な場面が作られてきた。そしてここ大館ではたまたまか、「苧萱桑門筑紫轆」の苧萱道心と石童丸の2人、「加賀見山旧錦絵」の尾上、岩藤、お初の3人が比較的多くの家に残されてきたようだ。しかしこの二題、よほど歌舞伎や浄瑠璃に詳しくなければ題名すら読めないのではないだろうか。

娯楽も少ない時代、浄瑠璃、歌舞伎に精通していた人が多かったとしても中央から遠い東北の一町村でどのようにして芝居の演目や登場人物を知ることができたのか、錦絵からか、行商人を介してか、または絵草紙などの本からであったのだろうか。

いずれにしても押絵雛の題材を決めるにはある程度の知識が必要であるし、さらに経済的に余裕がなければならなかったことはこれまでに雛の見つかった家から察することができる。

つまりはこの地域の人多くが雛を作っていたというわけではなく、また座雛が用意できないので押絵雛を作っていたわけでもない。雛祭

りに人形を飾って人を呼び、楽しむことができたのは生活にゆとりのある家であった。

長野県松本市では武家の副業としての押絵雛作りが盛んで、安価な布で多量に生産されていたと聞く。が、ここ北秋田一帯では各家で一体一体工夫しながら丁寧に作られ大切に保管されてきたようだ。沢山あったものも壊されたり小動物の餌食になったり汚いと捨てられたりして失われてきた中、今日まで残されてきたものが今ここにある。

今後とも埋もれている人形を見つけ出し記録してゆくことが博物館の務めであると考え。

文中敬称略

引用文献

荒谷由季子(2015):大館の押絵雛 火内,12,34-63.

https://doi.org/10.50884/hinai.12.0_34

大館市史編さん委員会編(1981):大館市史 第四巻,243,大館市.

記念誌、記録編集委員会編(1994):釈迦内小学校創立120周年記念誌 桜心,25,釈迦内小学校創立120周年記念事業実行委員会.

Shinya5222(2020)[Instagram投稿(2020年10月14日)].Instagram.

<https://www.instagram.com/p/CGUQ6-CnVfd/>(2025年12月2日閲覧)

odate-shakanai(2020):創立146周年.釈迦内小学校blog.

<https://odate-shakanai.hatenablog.com/entry/7378d3a2ac0ae598b1a473e3dc400e81>(2025年12月2日閲覧)

金澤家の押絵雛(図K1～図K5)



図K1-1



図K1-2



図K2-1



図K2-2



図K3-1



図K3-2



図K4-1



図K4-2



図K5-1



図K5-2

金澤家の押絵雛(図K6～図K10)



図K6-1



図K6-2



図K7-1



図K7-2



図K8-1



図K8-2



図K9-1



図K9-2



図K10-1



図K10-2

金澤家の押絵雛(図K11~図K15)



図K11-1



図K11-2



図K12-1



図K12-2



図K13-1



図K13-2



図K14-1



図K14-2



図K15-1



図K15-2

金澤家の押絵雛(図K16~図K20)



図K16-1



図K16-2



図K17-1



図K17-2



図K18-1



図K18-2



図K19-1



図K19-2



図K20-1



図K20-2

金澤家の押絵雛(図K21～図K25)



図K21-1



図K21-2



図K22-1



図K22-2



図K23-1



図K23-2



図K24-1



図K24-2



図K25-1



図K25-2

金澤家の押絵雛(図K26~図K30)



図K26-1



図K26-2



図K27-1



図K27-2



図K28-1



図K28-2



図K29-1



図K29-2



図K30-1



図K30-2

金澤家の押絵雛(図K31~図K35)



図K31-1



図K31-2



図K32-1



図K32-2



図K33-1



図K33-2



図K34-1



図K34-2



図K35-1



図K35-2

金澤家の押絵雑(図K36~図K40)



図K36-1



図K36-2



図K37-1



図K37-2



図K38-1



図K38-2



図K39-1



図K39-2



図K40-1



図K40-2

金澤家の押絵雛(図K41～図K43)



図K41-1



図K41-2



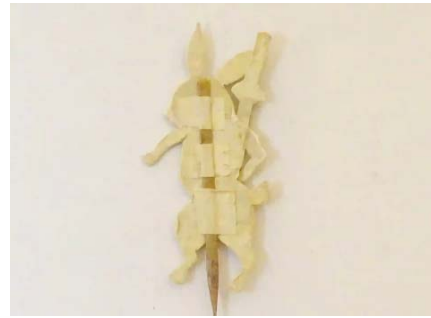
図K42-1



図K42-2



図K43-1



図K43-2

下遠家の押絵雛(図S1～図S5)



図S1-1



図S1-2



図S2-1



図S2-2



図S3-1



図S3-2



図S4-1



図S4-2



図S5-1



図S5-2

下遠家の押絵雛(図S6～図S10)



図S6-1



図S6-2



図S7-1



図S7-2



図S8-1



図S8-2



図S9-1



図S9-2



図S10-1



図S10-2

下遠家の押絵雛(図S11~図S15)



図S11-1



図S11-2



図S12-1



図S12-2



図S13-1



図S13-2



図S14-1



図S14-2



図S15-1



図S15-2

下遠家の押絵雛(図S16~図S20)



図S16-1



図S16-2



図S17-1



図S17-2



図S18-1



図S18-2



図S19-1



図S19-2



図S20-1



図S20-2

下遠家の押絵雛(図S21～図S22)



図S21-1



図S21-2



図S22-1



図S22-2

野口家の押絵雛(図N1～図N5)



図N1-1



図N1-2



図N2-1



図N2-2



図N3-1



図N3-2



図N4-1



図N4-2



図N5-1



図N5-2

野口家の押絵雛(図N6~図N10)



図N6-1



図N6-2



図N7-1



図N7-2



図N8-1



図N8-2



図N9-1



図N9-2



図N10-1



図N10-2

野口家の押絵雛(図N11～図N15)



図N11-1



図N11-2



図N12-1



図N12-2



図N13-1



図N13-2



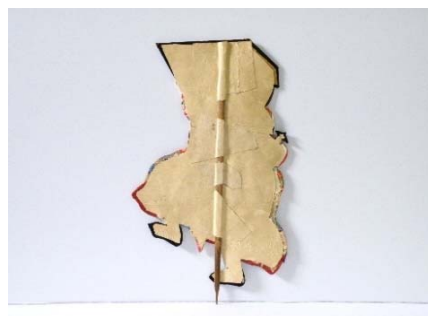
図N14-1



図N14-2



図N15-1



図N15-2

野口家の押絵雛(図N16~図N20)



図N16-1



図N16-2



図N17-1



図N17-2



図N18-1



図N18-2



図N19-1



図N19-2



図N20-1



図N20-2

野口家の押絵雛(図N21～図N25)



図N21-1



図N21-2



図N22-1



図N22-2



図N23-1



図N23-2



図N24-1



図N24-2



図N25-1



図N25-2

野口家の押絵雑(図N26~図N30)



図N26-1



図N26-2



図N27-1



図N27-2



図N28-1



図N28-2



図N29-1



図N29-2



図N30-1



図N30-2

野口家の押絵雛(図N31～図N35)



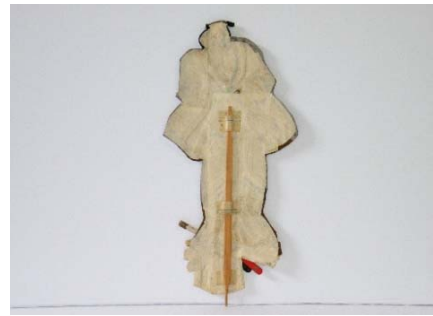
図N31-1



図N31-2



図N32-1



図N32-2



図N33-1



図N33-2



図N34-1



図N34-2



図N35-1

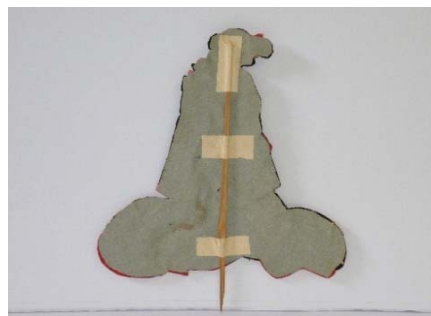


図N35-2

野口家の押絵雛(図N36～図N40)



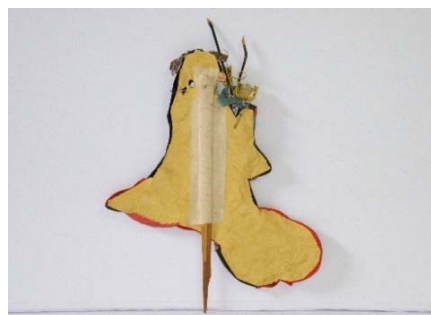
図N36-1



図N36-2



図N37-1



図N37-2



図N38-1



図N38-2



図N39-1



図N39-2



図N40-1



図N40-2

野口家の押絵雛(図N41)



図N41-1



図N41-2



座 雛

村上家の押絵雛(図M1～図M5)



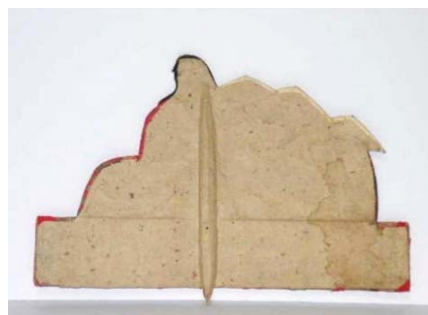
図M1-1



図M1-2



図M2-1



図M2-2



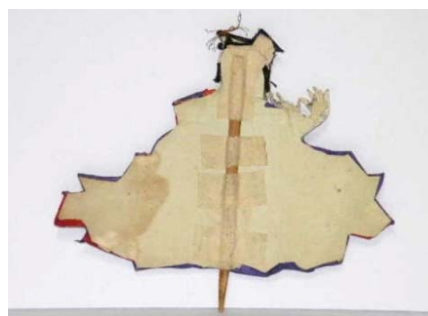
図M3-1



図M3-2



図M4-1



図M4-2



図M5-1



図M5-2

村上家の押絵雛(図M6~図M10)



図M6-1



図M6-2



図M7-1



図M7-2



図M8-1



図M8-2



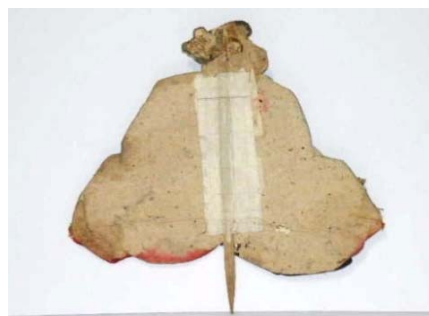
図M9-1



図M9-2



図M10-1



図M10-2

村上家の押絵雑(図M11~図M15)



図M11-1



図M11-2



図M12-1



図M12-2



図M13-1



図M13-2



図M14-1



図M14-2



図M15-1



図M15-2

村上家の押絵雛(図M16～図M20)



図M16-1



図M16-2



図M17-1



図M17-2



図M18-1



図M18-2



図M19-1



図M19-2



図M20-1



図M20-2

村上家の押絵雛(図M21～図M23)



図M21-1



図M21-2



図M22-1



図M22-2



図M23-1



図M23-2

小山家の押絵雛(図01~図07)



図01-1



図01-2



図02-1



図02-2



図03-1



図03-2



図04-1



図04-2



図05~7-1



図05~7-2

小山家の押絵雛(図05~図09)



図05-1



図05-2



図06-1



図06-2



図07-1



図07-2



図08-1



図08-2



図09-1



図09-2

小山家の押絵雛(図O10~図O14)



図O10-1



図O10-2



図O11-1



図O11-2



図O12-1



図O12-2



図O13-1



図O13-2



図O14-1



図O14-2

小山家の押絵雛(図O15~図O19)



図O15~19-1



図O15~19-2



図O15-1



図O15-2



図O16-1



図O16-2



図O17-1



図O17-2



図O18-1



図O18-2

小山家の押絵雛(図O19~図O23)



図O19-1



図O19-2



図O20-21-1



図O20-21-2



図O20-1



図O20-2



図O21-1



図O21-2



図O22-23-1



図O22-23-2

小山家の押絵雛(図O22~図O26)



図O22-1



図O22-2



図O23-1



図O23-2



図O24~26-1



図O24~26-2



図O24-1



図O24-2



図O25-1



図O25-2

小山家の押絵雛(図O26~図O28)



図O26-1



図O26-2



図O27-28-1



図O27-28-2



図O27-1



図O27-2



図O28-1



図O28-2

表1 金澤家押絵雑 (図K1～図K43) (名称の不明なものは見た目で表示)

図番	名称	縦×横 cm	備考 (題材名・裏使用紙)
図K1	官女 1	30.0×33.0	
図K2	官女 2	28.0×35.5	
図K3	官女 3	29.0×35.0	
図K4	官女 4	27.5×30.0	
図K5	官女 5	28.0×32.5	
図K6	官女 6	28.5×34.5	
図K7	官女 7	30.0×32.5	
図K8	鏡餅持つ御殿女中	39.5×24.5	
図K9	男雛	18.5×14.5	立雛
図K10	女雛	16.5×6.0	立雛
図K11	五人囃子 謡	23.0×24.5	
図K12	五人囃子 笛	22.0×23.5	
図K13	五人囃子 小鼓	22.0×24.0	
図K14	五人囃子 大鼓	24.0×24.0	
図K15	五人囃子 太鼓	21.0×23.0	
図K16	貴族・男	40.0×28.5	
図K17	貴族・男	38.5×25.5	天神様か
図K18	貴族・女	39.0×27.0	小野小町か・裏に「安」と「卯」の文字
図K19	武田信玄	35.0×31.0	川中島の戦い
図K20	上杉謙信	35.0×40.0	川中島の戦い
図K21	尾上	28.0×23.0	加賀見山旧錦絵 (かがみやまこきょうのにしきえ)
図K22	岩藤	37.0×23.0	加賀見山旧錦絵
図K23	お初	29.0×21.5	加賀見山旧錦絵
図K24	高砂 翁	27.0×21.0	
図K25	媪	26.0×35.5	
図K26	常盤御前	42.0×26.5	常盤御前雪中逃亡 (ときわごぜんせつちゅうとうぼう)
図K27	今若	33.5×19.5	常盤御前雪中逃亡
図K28	乙若	28.0×18.0	常盤御前雪中逃亡
図K29	荻萱道心	30.0×14.0	荻萱桑門筑紫鞆 (かるかやどうしんつくしのいえずと)
図K30	石童丸	17.0×10.0	荻萱桑門筑紫鞆
図K31	桃太郎	40.0×22.5	
	犬	17.0×17.0	
図K32	花魁 1	33.0×19.5	
図K33	花魁 2	31.0×19.5	
図K34	花枝持つ女	34.0×24.0	
図K35	踊り子 左側	21.0×14.0	
	踊り子 右側	21.5×14.0	

図K36	闘鶏 左側	23.0×18.0	
	闘鶏 右側	25.0×15.0	
図K37	三番叟 白 左側	20.0×11.3	
	三番叟 青 右側	17.5×16.0	
図K38	鹿乗り童子	25.5×20.3	
図K39	瓢箪抱き唐子 白 左側	15.0×15.0	
	瓢箪抱き唐子 紫 右側	16.0×10.5	
図K40	駒乗り遊び	20.0×12.0	
図K41	町娘 左側	29.0×14.0	
	町娘 右側	20.0×10.0	
図K42	武将	23.0×21.0	大石内蔵助か
図K43	ウサギ	15.0×7.8	

表2 下遠家押絵雛 (図S1～図S22) (名称の不明なものは見た目で表示)

図番	名称	縦×横 cm	備考 (題材名・裏使用紙)
図S1	男雛	23.0×32.0	
図S2	女雛	22.0×29.0	
図S3	五人囃子 謡	26.0×26.5	京都博覧會/山城物産共進會等茶壺広告
図S4	五人囃子 笛	26.0×23.0	共進會、第四、五回内国博覧會お茶広告
図S5	五人囃子 小鼓	27.0×24.0	
図S6	五人囃子 大鼓	28.0×21.0	
図S7	五人囃子 太鼓	29.0×23.0	志免町/御用心 ? 酒店
図S8	岩藤	25.0×39.0	加賀見山旧錦絵
図S9	尾上	26.0×28.0	加賀見山旧錦絵
図S10	お初	25.5×30.0	加賀見山旧錦絵
図S11	千歳	30.0×16.5	
図S12	面箱持	22.0×23.0	大正帝大典記念博覧會、全国製茶品評會
図S13	三番叟	24.0×21.5	
図S14	天神様	22.0×23.5	
図S15	大黒	23.0×15.0	小坂鉄道二ツ屋驛前三立社出張所 年賀はがき
図S16	恵比寿	27.0×25.0	
図S17	三番叟小	18.0×11.5	
図S18	闘鶏	29.5×16.0	明治34年新聞紙
図S19	子犬抱き	19.0×10.0	明治34年新聞紙
図S20	桃	11.5×18.0	
図S21	雀	7.0×9.0	
図S22	猩猩	23.0×20.0	秋田/ゼンホク/和知/カクタテ

表3 野口家押絵雜(図N1~図N41) (名称の不明なものは見た目に表示)

図番	名称	縦×横 cm	備考(題材名・裏使用紙)
図N1	五人囃子 謡	22.0×26.0	「純綿布」シール3枚で串留め
図N2	五人囃子 笛	22.5×25.5	
図N3	五人囃子 小鼓	22.0×20.5	
図N4	五人囃子 大鼓	21.0×22.0	
図N5	五人囃子 太鼓	22.0×25.0	
図N6	神功皇后	35.0×22.5	
図N7	武内宿祢	30.0×27.5	
図N8	曾我兄弟 弟	39.0×41.0	
図N9	曾我兄弟 兄	24.0×42.0	
図N10	天神様	30.0×35.0	
図N11	貴族・女	36.0×24.5	小野小町か
図N12	大黒(太鼓)	23.0×30.0	
図N13	恵比寿(笛)	28.0×28.0	
図N14	筍堀 たけのこほり	47.0×33.0	中国故事・孟宗
図N15	つづら担ぎ(小槌)	50.0×32.0	
図N16	つづら担ぎ(布団?)	47.0×33.0	
図N17	義経・静御前・舟曳き	41.0×105.0	義経千本桜
図N18	いがみの権太	30.0×13.0	義経千本桜
図N19	仁木弾正(原田甲斐)	29.0×23.0	伽羅先代萩(めいぼくせんたいはぎ)
図N20	栄御前	19.0×25.0	伽羅先代萩
図N21	八汐	21.0×26.0	伽羅先代萩
図N22	政岡	25.0×20.0	伽羅先代萩
図N23	鶴千代	16.0×20.0	伽羅先代萩
図N24	千松	16.0×16.0	伽羅先代萩
図N25	荒獅子男之助(隈取)	32.0×21.0	伽羅先代萩
図N26	荒獅子男之助(鉄扇または羽子板)	29.0×21.0	伽羅先代萩
図N27	姉・宮城野(鎖鎌)	33.0×29.5	宮城野・信夫の仇討(みやぎの・しのぶのあだうち)
図N28	妹・信夫(薙刀)	37.0×30.0	宮城野・信夫の仇討
図N29	志賀団七(仇討ち相手)	33.0×38.0	宮城野・信夫の仇討
図N30	男女2体	46.0×45.0	五三桐紋
図N31	鎖帷子、扇持つ若い男	39.0×23.0	天竺徳兵衛か児雷也か
図N32	浪人風老男	39.5×19.5	三方に刀二本
図N33	武家女	29.0×29.0	図32と同じ三方持ち
図N34	潮干狩り 男	22.0×22.0	
図N35	潮干狩り 女	24.0×20.0	
図N36	花魁	24.0×23.0	
図N37	矢場女	25.0×20.0	
図N38	町娘	19.0×21.0	八百屋お七か?

図N39	若侍	26.0×16.0	八百屋お七・寺小姓か？
図N40	武家女	31.0×16.0	文箱くわえ
図N41	烏帽子(横顔)	19.0×28.5	羽後西大館の文字有 村上家図19参照

表4 村上家押絵雛(図M1～図M23) (名称の不明なものは見た目で表示)

図番	名称	縦×横 cm	備考(題材名・裏使用紙)
図M1	男雛	27.0×34.0	
図M2	女雛	21.0×32.0	
図M3	五人囃子 謡	18.0×24.0	
図M4	五人囃子 笛	19.0×24.0	
図M5	五人囃子 小鼓	24.0×23.0	
図M6	五人囃子 大鼓	24.0×25.0	
図M7	五人囃子 太鼓	26.0×19.0	
図M8	大黒	27.0×19.0	
図M9	福祿寿	30.0×17.0	
図M10	恵比寿	23.0×26.0	
図M11	高砂 翁	15.5×10.0	
図M12	媼	14.5×7.5	
図M13	常盤御前と乙若	33.0×25.0	常盤御前雪中逃亡
図M14	今若	24.5×18.0	常盤御前雪中逃亡
図M15	佐藤忠信	17.0×12.0	道行初音旅(みちゆきはつねのたび)
図M16	静御前	20.0×12.5	道行初音旅
図M17	傘さす小姓	15.0×11.0	
図M18	町娘	24.0×11.0	
図M19	烏帽子(横顔)	18.0×24.5	野口家図41参照
図M20	面箱持	19.5×22.0	
図M21	千歳	30.0×19.0	
図M22	三番叟	31.0×23.0	
図M23	桃太郎	20.0×23.5	

表5 小山家押絵雑 (図〇1 ~ 図〇28) (名称の不明なものは見た目で表示)

図番	名称	縦×横 cm	備考 (題材名・裏使用紙)
図〇1	男雛	27.0×35.0	
図〇2	女雛	28.0×43.0	
図〇3	牛乗り天神	42.5×28.5	
図〇4	宝船・桃太郎鬼退治	26.0×13.5	裏に制作年、制作者名の書き込み有
	常盤御前雪中逃亡	————	
図〇5	常盤御前	31.0×18.0	
図〇6	今若	23.0×14.5	
図〇7	乙若	21.5×11.0	
図〇8	司馬温公甕割	22.5×23.0	
図〇9	猩猩(しょうじょう)	22.0×14.5	
図〇10	鯛運び	29.0×21.5	
図〇11	巫女風女	30.0×15.0	
図〇12	武家風女	14.5×22.0	
図〇13	公家風男	27.0×17.5	
図〇14	鳥籠持ち	11.5×16.0	
	五人囃子全体	————	
図〇15	五人囃子 謡	8.0×8.0	
図〇16	五人囃子 笛	8.0×7.0	裏にはがき使用(消印1920年)
図〇17	五人囃子 舞	10.0×7.5	
図〇18	五人囃子 大鼓	8.0×8.0	
図〇19	五人囃子 太鼓	7.5×9.5	
	神功皇后・武内宿禰	————	
図〇20	神功皇后	10.0×7.0	
図〇21	武内宿禰	9.5×9.5	
	高砂	————	
図〇22	翁	11.0×6.5	
図〇23	媼	9.0×8.0	
	伽羅先代萩(めいぼくせんたいはぎ)	————	
図〇24	政岡	8.0×7.0	裏に1銭5厘のはがき使用
図〇25	千松	6.5×5.5	
図〇26	鶴千代	6.5×6.5	
	和装女子・洋装女子	————	
図〇27	和装女子	15.0×5.5	
図〇28	洋装女子	14.0×6.5	

大館郷土博物館研究紀要

火 内

第 20 号

2026(令和8)年3月31日発行(オンライン)

編集 大館郷土博物館
発行 大館郷土博物館
〒017-0012 秋田県大館市釈迦内
字獅子ヶ森1番地
TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512
Email kyodokn@city.odate.lg.jp